

Title	風景形態の意義
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.74(430)- 74(430)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

風景形態の意義

小田内通敏氏の近著、「郷土地理研究」の説く所では、『風景なる言葉は、通俗語として我々の常に用ひてゐる言葉ではあるが、それが最近地理學の術語として用ひられて來たのは、ドイツの Landschaft (註) 即ちイギリスの Landscape によつてあらはされてゐる概念が、地理學上最も重要な基本觀念となつて來たからである。然らば此の「風景」なる言葉は、今日地理學的に如何なる意義を有つてゐるか。ザウエル教授に據れば、「イギリスでの風景なる言葉は、ドイツの地理學者が「土地の形狀」 A Landscape なる言葉の意味は、決して自然的形狀の過程ばかりをいふのではないのと同じやうに、それが自然的並文化的諸形態の結合から成立の特殊的地域であつて、有機的實質を有つてゐる事を意味する。」との見解から、「風景」は地域的實在 Areal Reality であり、それが地球表面の地理的研究の單位であるとされて來たからである。此の地域的實在即ち風景は、特定地域内に於ける人類に關係深い自然的實質と、人類の利用形態と人類文化の事實とに見出されるのであつて、ドイツのクレーブスは、此の風景の原理の自然的並文化的內容に對して、Natural-and-Kultur-Landschaft なる名稱をつけた。最近我が地理學界に於て、これを自然景並文化景なる術語に譯して用ひてゐるが、自分は以上述べたやうな意義を明かにする日本語としては、これを自然景並文化景といふよりも、寧ろ自然的風景形態並文化的風景形態とする方が、遙かに立體的な内容を表現し得るやうに考へてゐる。殊に Natural Landscape は人類の任意になし得る地域に於けるあらゆる自然的資源の總量を指すのであり、Cultural Landscape はある地域に對しての人類の業蹟の足跡であり文化に就いての正しい地理學的な考へ方である、といふ意義を明かにする言葉としては、自分はこれを單に風景といふよりも風景形態をいふ方が、より學術的でありより內面的であると考へてゐる。ザウエル教授の公にされた論文も、題して The Morphology of Landscape いふのは、此の意味に外ならぬと信ずる。』(一四三一五頁)

『(註) Landschaft と「風景」を譯されたる文献は、小藤博士の「長白山陰草王ノ黃金國」、「東洋學藝雜誌」明治四十四年十一、十二月號に、「韓邊外領域内ノ風景ト地勢」に見る。しかし「風景」を譯されたのを、同博士は適語と思はれてゐない事は、近年自分がこれを質した時に答へられた所である。大内京城大學教授は、之を「風土」と譯して(「人文地理學的地位」「人文地理」第一卷第一號)居られるが、岡田中央氣象臺長も同意見で、最近殊に、風土の研究に着目されてゐる。ドイツの文献に通じて居られる山岸博士は、「近年ドイツに於て Landschaft は多く風景の意味に用ひられてゐるが、地理學に於ては「風土」を譯するのが、適當である。」[○] 支那の文献に、「周語」に「以省二風土」、「後漢書」西域傳に「莫下不備二其風土」傳其珍怪上焉」[○] また「晉書」劉毅傳「歎曰、風景不殊舉目有江山之異」[○] である所から見ても、風土が適語である。拙文中に風景形態としたのは、本文の題意では廣義の風土よりも、更らに狹義であるからである。』(一五三一四頁)。(間崎万里)